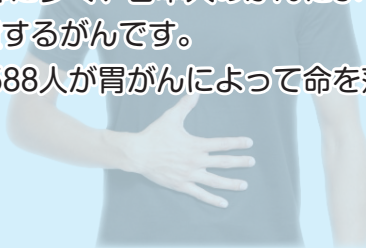


胃がん検診のおすすめ

●早期発見・治療で治る病気です

胃がんは50歳代以降に多く、日本人のがんによる死亡原因の上位に位置するがんです。

2022年には県内で588人が胃がんによって命を落としています。



2022年部位別がん死亡者数

全国

全体	部位	人数
1位	肺	76,663
2位	大腸	53,088
3位	胃	40,711
4位	膵臓	39,468
5位	肝臓	23,620

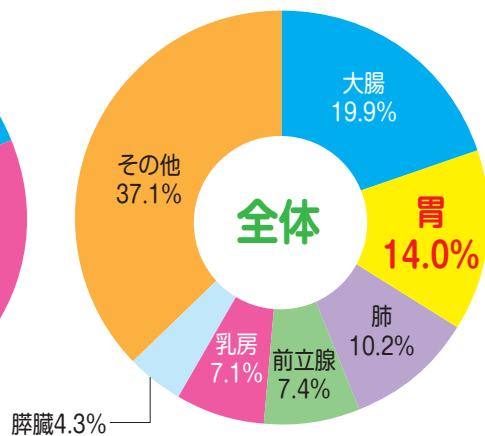
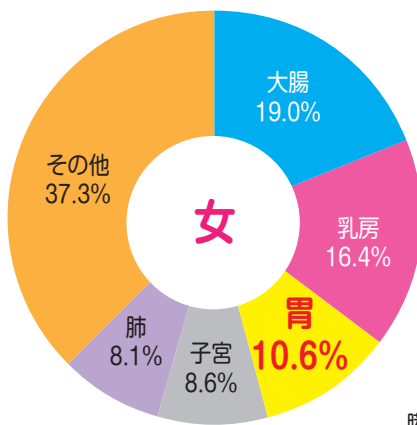
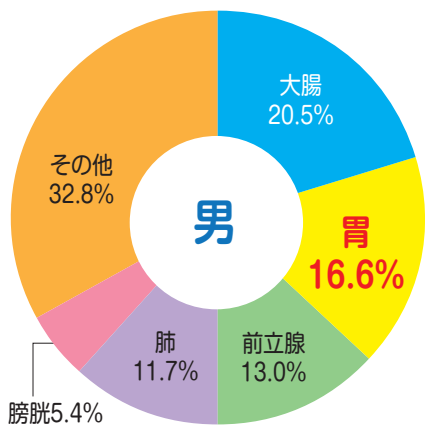
秋田県

全体	部位	人数
1位	肺	759
2位	大腸	652
3位	胃	588
4位	膵臓	407
5位	胆のう	281

国立がん研究センター がん情報サービス「がん統計」(厚生労働省人口動態統計)より
秋田県「令和5年度がん対策策報告書」より

2020年 秋田県がん部位別罹患割合(%)

令和5年度秋田地域がん登録集計報告書より



●胃がんの原因とヘリコバクターピロリ菌

胃がんの原因としては、塩分の多い食品の摂取や、野菜、果物の摂取不足が指摘されています。また、ヘリコバクターピロリ菌の持続感染が原因と言われていますが、感染した人すべてが胃がんになるわけではありません。現在、除菌療法が胃がんにかかるリスクを低くするという研究結果が集積されつつありますので、感染していることがわかれば、除菌療法が推奨されます。

※除菌療法後も定期的な胃がん検診が必要です。



●早期発見のため、がん検診を受けましょう

がんの診断・治療法は急速に進化しており、初期のうちに見つければ100%近く治すことが可能になってきていますが、それを過ぎると治すことが大変難しくなります。

健康で幸せな生活をおくるために、がん検診を受けて、自身の健康を確認するようにしましょう。



胃がん検診はこうして行います

前日：食事は普通にとり、夜9時以降は禁食してください。就寝前まで水分摂取は可（アルコールは不可）。

当日：①起きたら食事はとらないでください。ただしコップ1杯（200ml）程度の水は検診の2時間前までなら飲んでかまいません。②血圧や心臓のお薬は早めにお飲みください（検診の2時間前まで）。③検査が終了するまで喫煙しないでください（検査精度が低下する場合があります）。

受付・問診

撮影の準備

無地のTシャツ(肌着)一枚で撮影します。金具のついた衣類や体を締め付けるゴムが入った下着・アクセサリー・エレキバン・湿布等は外してください。

発泡剤とバリウムを飲む

係の指示で発泡剤とバリウムを飲みます。発泡剤は飲むとゲップをしたくなりますが、撮影が終わるまでゲップをださないように我慢してください。

X線撮影

X線撮影は、透視をしながらうつ伏せや仰向けなど体を回転させて、8枚以上の写真を撮影します。撮影技師の指示に従い体の位置を変えますが、できるだけ力を抜いて、そのままの姿勢で呼吸を止めるようにします。この時、**両わきの手すりをしっかりとつかんでください。**

異常なし
精密検査不要

異常あり

必ず受診してください

精密検査

異常なし

良性疾患

がん

次回の検診

主治医の指示に従ってください

治療

次に該当する方は検診を受けることはできません。

- ・妊娠している方、妊娠の可能性がある方
 - ・以前にバリウムを飲んで具合が悪くなったり、アレルギー症状が出たことのある方
 - ・体重が130kg以上の方
 - ・のどの病気や手術をしたことがある方
 - ・肺切除をしている方
 - ・検査当日まで一週間以上排便がない方
 - ・検査当日にインスリンや血糖降下剤を服用した方（ただしインスリンポンプ使用の方は受診可能です）
 - ・胃がんの診断を受け治療を継続している方
- ※授乳中の方は下剤の成分によって赤ちゃんが下痢をおこすことがあります。

問診では、現在の症状、既往歴、家族歴、過去の検診の受診状況等についてお聞きします。

「要精密検査」の結果が届いたら・・・

精検依頼書とマイナ保険証等資格情報が確認できるものをもって必ず専門医療機関を受診してください。

精密検査では、**胃内視鏡検査**を行います。

胃内視鏡検査

内視鏡を鼻や口から挿入して、先端のカメラで胃の中の状態を観察する検査で、胃がんかどうか疑わしい病変があった場合にはその部位を少量採取して顕微鏡で詳細に調べる検査（組織細胞診）を行います。



精密検査の結果は自治体と関係医療機関で共有し、検診の精度向上に努めています。

検診ですべてのがんが見つかるわけではありません。また、がんでなくても検診の結果が「陽性（要精密検査）」となる場合もあります。しかし、X線検査による胃がん検診は胃がんの死亡率・罹患率を減少させる有効性があります。早期発見のために、**40歳以上の方は毎年、検診を受診してください。**なお、気になる症状がある場合は次の検診を待たず、すぐに専門医を受診しましょう。